

ABC と聖書

——17世紀後半のイギリスにおけるアルファベット =綴字教育とその教材

鶴 見 良 次

イギリスにおける民衆児童のための初期の英語教育が宗教教育ときわめて密接に結びついていたことは、すでにいくつかの拙稿で論じてきた¹⁾。英語の読み方を学ぶことは、すなわち聖書が読めるようになることを意味した。たしかに、17世紀後半の英語教科書の多くには、聖書に関連する語彙、例文、文章などが示されている。アルファベットや綴字を学び始める子供たちに教師が規範的テキストとして示すことができるのは、新約聖書や旧約聖書の内容に基づくものであった。しかし、それらの教師たちが用いた教科書における聖書関連のテキストは、綴字や分節の理解のために断片的に用いられていることが多い。それらは英語教材として示されているのであり、必ずしもそこから直接的に宗教的知識を得るためのものではなかった。本稿では、17世紀後半の代表的な綴字教科書をいくつか取り上げ、それらの教授法と聖書関連テキストの扱われ方を検討する。それによって、イギリス近代の初等英語教育において、当時の子供たちが身につけるべきとされた宗教的知識と社会的技能としての読み書きとがどのような関係にあったかを考察する。

I

17世紀後半の綴字を中心とする英語教科書の多くは、ラテン語などの古典語を学ぶグラマー・スクールではなく、英語を学ぶためのイングリッシュ・スクールと呼ばれる学校で使われることを主たる目的として作られた。貧しい階層の子供たちにとっては古典語・古典文学の教養は不要であった。一方、おりからの産業社会の発展に伴って、英語の読み書きと計算の能力が就労にあたって求められるようになっていた。宗教およびいわゆるスリー・アールズ (three R's) と呼ばれる読み、書き、

算数を教える寄付基金によるイングリッシュ・スクール、あるいは初等学校 (elementary school) などと呼ばれる学校の創設に対する社会的な要請も高まった。これらの学校のうちあるものは、グラマー・スクールに併設されて、そこへ進学するための予科としての役割を果たした。しかしそれ以外の多くの学校は、それ自体独立したものとして設立された。子供をグラマー・スクールに上げない、あるいは上げられない親たちの求めと、実学を重んじ、古典語を教えない学校建設に対する創設者たちの意欲によって、多くのイングリッシュ・スクールが設立された。17世紀末にはそうした慈善基金による学校がイングランドとウェールズに460はあったと公式に報告されている²⁾。

これらの学校の急増は、英語教育の一般化を意味しただけではなく、算数、理科、社会などの科目を英語で教えるという、新しい初等・中等教育のかたちの発展と並行したものであった。それは、『チャリティー・スクール運動』の著者 M・G・ジョーンズの言葉を用いれば、「ヴァナキュラーな言語の勝利や新しい知的関心の広がり」と密接に結びついたものであった³⁾。18世紀の間に寄付基金によって創設された学校のうち、グラマー・スクールは128校であったのに対し、貧しい子供たちのための何千もの初等学校が建設され、多くの奨学金が支給された。それと並行して、1698年に結成された英国教会の布教組織であるキリスト教知識普及協会 (The Society for Promoting Christian Knowledge、以下 SPCK と略記) を中心に、寄付や募金によって運営されるいわゆるチャリティー・スクールの建設運動が全国的規模で展開された。寄付基金校においてもチャリティー・スクールにおいても、その目的は、宗教教育を通して貧しい子供たちの道徳的向上をうながすべく、無償で就学させることであった。第一の教育目標は、教理問答や祈祷書など、聖書に関連するテキストを読めるようにすることであり、そのために英語教育の重要性が認識されたのである。しかしそれとともに、これらの学校は、貧しい子供たちに英語の読み書きを就職のための世俗的な技能として学ばせるという目的も担っていた。

それでは、これらの学校で用いられた英語の教科書において、それらの目標がどのように反映しており、その達成のために、聖書に関連する教材がどのように用いられたのだろうか。以下では、SPCK が結成され、その管理のもとに多くの教科書が出版されるようになる以前、すなわち

17世紀後半までにイングリッシュ・スクールのために編まれ、その後も多くの学校で用いられたアルファベット=綴字教科書について考察する。

II

イングリッシュ・スクールの生徒のための教科書の1つであるトバイアス・エリスの『イングリッシュ・スクール』⁴⁾は1670年に出版された後、17世紀の間に何度も版を重ねた。副題には、「短音節語から段階を追って7音節語まで、分節した語およびしていない語による聖書中の全語彙収録。全基本常用語一覧表付き」とある。子供が読み書きや発音を覚えるうえで大きな助けとなる分節法を示した代表的な教科書である⁵⁾。さらに、「神の宣託の基本教理、および各教理を証明する聖書からのくわしい引用付き」ともされており、綴字の知識を試す教材が聖書関連のものであることが示されている。内容は副題に示されたとおりである。146ページにおよぶ語彙集のあと、巻末近くから「子供のための神の宣託の基本教理」が44頁にわたって載せられている。冒頭は「神は (a) お1人であり、神には (b) 3つの人格、すなわち父と子と聖霊があり、ただ1人の (c) 造り主であり、(d) あがない主であり、(e) 人類の清めの主である」である。() で指示された語には出典となる聖書からの引用が付されている。ちなみに「3つの人格」の出典は、「使徒行伝、17章24、26節。この世界とその中の万物を造った神は、ひとつの人からあらゆる民族を造りだし、地の全面に住ませた」である。(147頁)。名詞に愛らしいイメージを付けた子供の興味をひく両面刷りのピクチャー・アルファベットが3枚折り込まれている。2枚目のもの^{おもて}の表面(図1)にはハイフンで分節された3音節語をアルファベット順にほぼ2語ずつ並べた表とともに、「1. 全能の父である神様を信じなさい」で始まる「使徒信条」12か条が示されている。「使徒信条」は父と子と聖霊に対する信仰告白を定式的に表した文章である。同書のもは「1. 私は全能の父にして天と地の造り主、2. そして私たちの主であるその子イエスを信じます。3. 彼は生霊によって身ごもった処女マリアから生まれました」で始まる。その右側にはABC順にアーティチョーク (Ar-te-choke)、彗星 (Blaz-ing-star)、ろうそく立て (Can-dle-stick) と続くピクチャー・アルファベットがある。裏面^{うら}も24のます目のピク

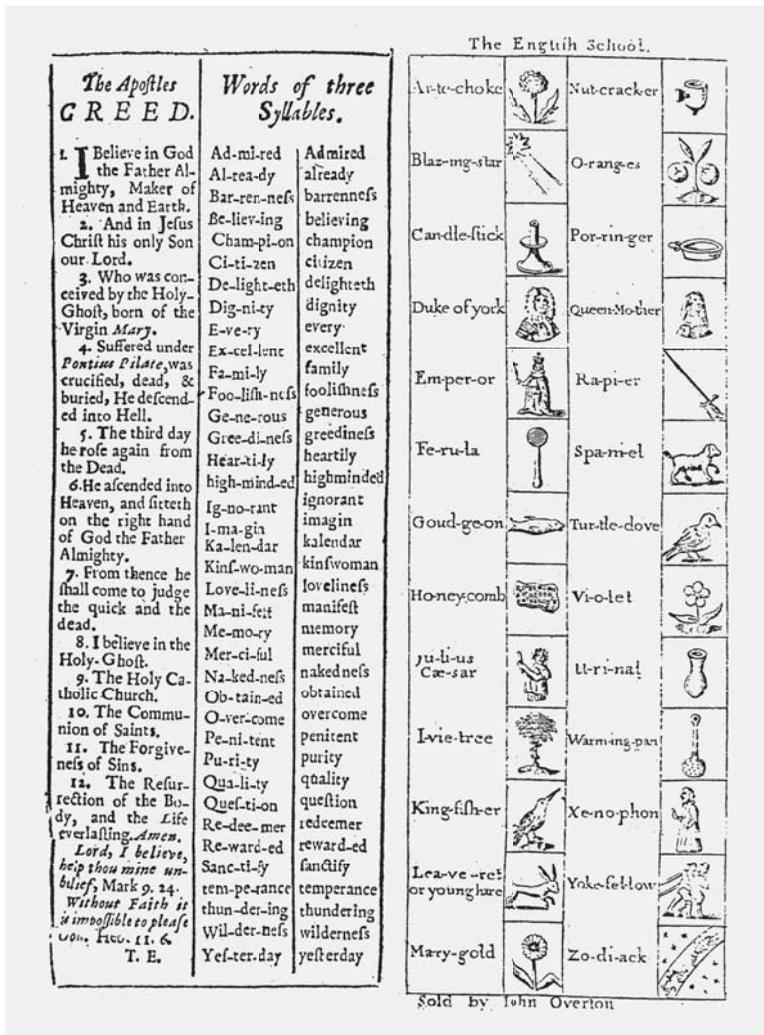


図1 トバイアス・エリス『イングリッシュ・スクール』(1670)、折り込み

チャー・アルファベットである。1枚目に添えられたテキストは「十戒」である。子供に綴りと信仰を、ともに楽しく学ばせるための工夫がなされている。

一方、エリスの折り込みにも印刷されていた旧約聖書が伝える十戒を主テキストとしている教科書がエドワード・コカーの『優秀な英語教

師』(1696)である。コカーはむしろ算数の教科書の著者として知られるが、同書も18世紀半ばまでに18刷を数えた⁶⁾。副題が示すように、「分節した、またしていない短音節から6、7、8音節までのほとんどの常用語、聖書その他の書に出てくる固有名詞などからなるさまざまな種類の語彙一覧表、また正確な書き方のための適切な指導法」などを含む。綴字、読み方、書き方全般にわたる教科書である。アルファベット表から始まり、3ページほどの母音と子音の説明のあと、すぐに福音書のいくつかの章からの例文、祈祷、信条が9ページ続く。次に示されるのが韻文で著された十の戒めとそれにまつわる物語である。1ページに1つずつの戒めが、印象的な場面の木版画とともに載せられている(図2)。第1の戒めは「私以外に他の神々があってはならない」である。本文の冒頭の一節は以下のようなものである。

WHO is the Lord, says *Pharaohs* hardned Heart,
That I should him obey: But by the smart
Of Gods Ten Plagues, and overflowing Flood,
He Gods Almighty Power understood. (p. 16)

十戒の韻文の内容は難解であり、内容の厳めしさも考え合わせると、同書は読み書きを始めたばかりの生徒のためのものではなく、むしろある程度読むことのできるようになった者の自習用の書でもあると考えられる。十戒の後の26ページから91ページまで、すなわち本書の大部分は語彙集であり、そのあとにはカリグラフィーの初歩を含む書き方、句読法、発音と綴りの関係が紛らわしい語、大文字、度量衡などの解説と一覽へと続き、末尾に子供用祈祷が3ページ添えられている。一言で言えば、同書は語彙集であり、その前後に、若干の教材が添えられている。英語の知識を整理しながらより確かなものにするためのものであると言える。そのことは「読者へ」と題された発行人の序言の「書き方や算数を十分修得している者なら、まちがいなく巧みな話し方や読み方は十分心得ていよう」という文からもわかる。

このほかにも、何らかの形で聖書に関連する語彙や例文が示された17世紀末の英語教科書は多い。たとえばハートフォードのビショップ＝ストーフォード校教師クリストファー・クーパーの『英語教師』(1687)⁷⁾

I. Commandment. *I bow: shall have no other Gods but me.*Pharaoh drowned in the Red Sea. *Exod. 5. Chap.*

WH O is the Lord, says *Pharaohs* hardned Heart,
That I should him obey. But by the smart
Of Gods Ten Plagues, and overflowing Flood,
He Gods Almighty Power understood.

The *Egyptian* Bondage Typified all
The Race of *Adam* in their native thrall:
And as their Temporal Saviour *Mofes* than
Left not behind one hoof, much lets a Man
Inflav'd to *Pharaoh*; fo the blessed Son
Of this great God hath Ranfom'd every one
From that tad Houfe of Bondage and of Pain,
Where we without Redemption elfe had lain:
For which great Favour he from us doth crave,
That we no other God but him should have;
And that we love him with a reverent awe,
Which is the whole fulfilling of this Law,

Lord I befeech thee for the time to come
So wary keep me of departing from
This Law, that I may still in Heart and Hand,
Continue faithful unto this Command.

II. Com-

図2 エドワード・コカー『優秀な英語教師』
(1696)、16頁

たとえば、聖書の各書の章数の一覧、祈祷における「キリストの3つの職務」、「モーセ5書」、「キリストの7段階の屈辱」、そして「十戒」などがそれぞれ示されている。英語、数、聖書の内容を連動して覚えるよう工夫されているのである。

III

イングリッシュ・スクールで用いられた英語教科書のなかに、きわめて頻繁に聖書の内容に関わる語彙や例文、あるいは文章が見られることの理由をどのように考えたらよいのだろうか。庶民の子供たちのための英語教育は、教理問答や聖書を読めるようにさせ、それによって宗教知

は綴字と発音の関係を詳しく解説したすぐれた教科書だが、教理問答に基づく祈祷にも使える2ページの「人の務め」が末尾に付けられている。そこでは、国王以下、行政官、教師、牧師、雇い主への従順や勤勉が求められている。同じく綴字と発音の関係を解説したロンドン、ロンバード・ストリート教会元牧師トマス・ライの『子供の歓び』(1671)⁸⁾は8ページのかわいらしいピクチャー・アルファベットに始まる。子供が楽しみながら初歩から英語を学べる教科書である。その数詞の章は、聖書における「数」についてのさまざまなことがらが簡条書きで示されたものである。た

識を与えることを目的としていた。そのため、用いられたテキストの多くが聖書関連のものであったことは当然のこととも言える。しかし、ここで注目すべきは、上に紹介した数少ない教科書の例からもわかるように、これらの教科書の主眼は綴字と分節の知識を体系的に習得させることにあり、宗教的な内容はむしろ断片化されていることである。これらの本を著わした英語教師たちの熱意を、宗教的な知識を得させるという目的のみから説明することはできない。これらの教師たちの情熱は、子供にリテラシーをつけさせようとする社会的な使命感によっても支えられていたと言えよう。聖書に関連する文章は、学習者の英語習得の達成度を確認するための普遍的なテキストとして用いられている。たしかに、英語の基本的なリーディング能力を習得したうえで、正規の聖書を読みこなす練習、さらにはその内容の詳しい理解へとカリキュラムが進む。したがって英語教育は常に宗教教育と並行して行われていたが、その関係は案外複雑である。生徒の年齢やリーディング力の発達段階に応じて、どちらにその重点が置かれていたかは、それぞれの学校、おのおのの教師あるいは教科書執筆者によって異なる。そして英語教育により重点が置かれるようになれば、それとともに英語教育の世俗的な性格がより強まると考えられる。

たとえばコカークの『優秀な英語教師』の発行人は、「読者へ」と題された序言で、国家やその未来にとっての教育の有用性を訴えたあと、若者にとって「読み書きを習得することは、無知文盲の者たちが就くような卑しい職に就いて暮らしてゆかずにすむようにさせてくれるばかりでなく、永遠の魂の救済をもたらす神の言葉を読み、理解することができるようになるという意味で、将来の人生に大きく利するものともなるのである」と言う。たしかに、ここには子供に英語を学ばせる目的が、英語すなわち「神の言葉」を理解させ、信仰を身につけさせることとする「崇高な」理念が明らかに認められる。しかしその一方で、十分なリテラシーを身につけることが、子供の将来の世俗的な利益、すなわちよりよい職を得ることにつながるとする認識も見られる。宗教、英語、就職という本来概念としては別の次元にあるものが、この序論のなかでは、「人生に大きく利する」という文言のもとに、1つの文脈に結び付けられているのである。

また、アルファベット、綴字、発音、および品詞解説などの基礎文法

からなる純然たる英語教科書である『子供の歓び』の序言で、ライは同書の目的を、子羊を養った聖ピーターに自らをなぞらえて、「すみやかに子供たちに聖書を正確に読めるようにさせること」であるという。そして、教師に対し、「幼い者たちに常に心をくだき、実を結ぶやり方で面倒をみていただきたい。教会区のなかの貧しい子供一人でもよいから、聖書を読み、字を綴り、正しい英語を書き、計算ができ、立派にやっつけられるようになるまで、みずからの犠牲をはらってでも育ててやっていただきたい」と述べている。さらに続けて、「一人の貧しい子供の教育のためだけにでも、おのおのの教会区に目を配ろうではないか。そうすれば（地理の専門家がまちがっていなければイングランドとウェールズには9,725の教会区が存在するのだから）数年を経ずして、神を讃え、王国とその人々に仕える、前途有望な若者のどれほどの軍団が現れようか」と訴えかける。ここでも、英語を読めることはすなわち聖書を読むことであるとされ、英語の読み書きができることはすなわち仕事をするうえでの基本技能であるとされている。そして、貧しい子供たちへの英語教育が「神を讃え、王国とその人々に仕える」人材の養成へと結びつくとする文脈からは、神の言語であり、国家の言語である英語の教育をあまねく国民に普及させることが、イギリスの近代化にとって緊要であるとの認識が見て取れる。これと同じ思想のもとに、およそその30年後にSPCKが結成され、チャリティー・スクールの建設が精力的に開始されるのである。

チャリティー・スクールは、教理問答学校とも呼ばれたことからわかるように、その教育内容はきわめて宗教色の強いものであった。しかし、これまで見てきたように、この段階までに初等英語教育はすでに一定の世俗化を進めており、むしろ「国語」の教育としての性格を強めていた。すなわち英語の読み書きは「神を讃える」とともに、「王国とその人々に仕える」者たちのためのものであり、貧しい子供たちがよりよい職を得るための技能として認識されるようになっていたのである。それでは、まさしくそうした時代の子供たちを受け入れるようになったチャリティー・スクールの英語教育はいったいどのようなものであったのだろうか。そして、それらの学校の基本的な教材であった聖書とその関連のテキストはどのように用いられたのであろうか。SPCK結成以後のチャリティー・スクールの宗教教育と英語教育における教材としての

聖書については、別稿で詳しく論じる。

IV

17世紀後半に盛んに創設されたイングリッシュ・スクールや初等学校の英語教科書の多くは、何らかのかたちで聖書の内容を含むものであった。それはこれらの学校の本来の目的が、貧しい子供たちに聖書を読めるようにさせ、それによって彼らの道徳的向上を図ることにあったことによる。生徒に「神の言葉」を理解できるようにすることが英語教師に課せられた使命であった。宗教教育は「神の言葉」の教育であり、それはすなわち英語の教育であった。一方、産業社会の進展に伴って、多くの学校の創設者たちや英語教師にとって、英語の読み書き能力は子供たちの徳育にとって必要なだけでなく、「無知文盲の者たちが就くような卑しい職」ではない仕事を得るための必須技能として認識されるようになっていた。英語の運用能力によって、職業上の社会的な上昇が可能であるとする認識が認められる。この時代の人々は、初等英語教育を通して階層的な社会認識を獲得しているとも言える。アルファベット=綴字教育における聖書関連のテキストは、生徒たちが勤労者にふさわしい道徳心を養うとともに、読み書きという社会的技能を習得するための、言わば二重の意味で世俗的な性格を持った教材として用いられたのである。

* 本稿は成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

注)

- 1) たとえば「後期チャリティー・スクールの英語教材としての墓碑詩——18世紀イギリスの英語教育についての一研究」(『成城大学短期大学部紀要』35号、2003年3月、47-60頁)、「『教理問答付きABC』の伝統——イギリスのチャリティー・スクールにおける英語綴字教育」(『成城イングリッシュモノグラフ』40号、2008年3月、265-87頁)。
- 2) 本節の17、18世紀の初等学校一般に関する記述は、M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (London, 1964), p. 15-19に多くを負う。
- 3) Jones, p. 18.
- 4) Tobias Ellis, *The English School: Containing, a Catalogue of All the Words*

- in the Bible*, 5 th edn (London, 1680; repr. Menston, 1969).
- 5) Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), pp. 77 – 89を参照。
 - 6) Edward Cocker, *Accomplish'd School-Master: Containing Sure and Easie Directions for Spelling, Reading, and Writing English* (London, 1696; repr. Menston, 1967). Victor. E. Neuburg, *Popular Education in Eighteenth Century England* (London, 1971), p. 70; Michael, p. 424を参照。
 - 7) Christopher Cooper, *The English Teacher; or, The Discovery of the Art of Teaching and Learning the English Tongue* (London, 1687; repr. Menston, 1969).
 - 8) Thomas Lye, *The Childs Delight* (London, 1671; repr. Menston, 1968).